

番組

神歌

山階彌右衛門

佐川 勝貴

武田 崇史
清水 義也
武田 尚浩
武田 文志

舞 囃子

14:15頃

高

砂

八段之舞

観世 清和

原岡 一之
観世新九郎

小寺真佐人
一噌 隆之

関根 祥丸
清水 義也

浅見 重好
岡 久広
武田 尚浩

14:35頃

唐

船

盤 涉

大槻 文藏

原岡 一之
観世新九郎

小寺真佐人
一噌 隆之

関根 祥丸
佐川 勝貴

武田 友志
上田 貴弘
松木 千俊

14:55頃

休憩三十分

能

清水 義久

武田 宗和

福王 知登
福王 和幸

国川 純
鶴澤洋太郎

杉 信太郎

15:25頃

関寺小町

武田 宗典

観世 清和

観世 恭秀

武田 祥照
武田 文志
武田 友志
松木 千俊

浅見 重好
岡 久広
武田 志房
上田 貴弘

附祝言

終了予定 十七時十五分

【あらすじ】

関寺小町 (せきでらこまち)

① 作り物(舞台装置)の運び出し

後見が引き廻しを掛けた葦屋の作り物を運び出します。冒頭の場面では、まだ舞台には見えていないという設定です。

② 関寺の僧と稚児の登場

お囃子による「次第」が演奏されると、関寺(滋賀県大津市にあった寺)の住僧(ワキ)が、供の僧(ワキツレ)と稚児(子方)を連れて登場します。今日は七月七日。関寺では七夕の祭がおこなわれます。近くの山陰の庵に住む老女が、歌の道を極めていると知った僧は、話を聞くために老女の庵に向かいます。

涼しい風の吹く、初秋。七夕の祭では管絃を奏し、和歌や機織りの上達を願って五色の糸を竹竿に掛け、薄や秋の花を飾ります。折から吹きつける松風までも、祭の供え物のように思われる夕暮れです。

③ 庵の中の老女

後見が葦屋の引き廻しを降ろします。葦屋には老女(シテ)が一人、座っています。葦屋の両側には短冊が吊るしてあります。

朝餉の一鉢、夕寒を耐える一衣も満足にない、老女のわびしい暮らし。花は雨が降るたびに色あせ、柳は風に吹かれて緑を薄くしていきます。若さは永遠ではなく、季節は廻っても、昔に帰ることはありません。老女は昔を恋しく思い、涙にくれます。

④ 老女と僧のやりとり「和歌の歴史と永遠性」

僧が老女の庵に近づき、寺の稚児に歌の詠み方や話を聞かせてほしいと頼みます。埋もれ木のように忘れられている自分に話すことは何もないと老女は謙遜しますが、心に思うことを美しい言葉で彩ればよい歌になると言い、幼い者が歌に心を寄せることに感心します。僧の問いかけに対して、「難波津に咲くやこの花冬籠り今は春べと咲くやこの花」が歌の規範となっていること、この歌と「安積山(あさかやま)影さへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふものかは」は歌の父と母であることを教えます。さらに歌の種は心であると論じ、どれだけ時が経とうとも歌の道が絶えることはないと言及しました。

⑤ 老女と僧のやりとり「老女の素性」

僧は老女に感謝し、なおも問います。老女は「わが背子が来べき宵なりささがにの蜘蛛の振る舞ひかねてしるしも」は衣通姫(そとおりひめ)の歌であり、自分も衣通姫の流儀を学んだ者であると答えます。僧は小野小町こそ衣通姫の流れを汲む者だと言ひ、小町の歌「侘びぬれば身を浮草の根を絶えて誘う水あれば往(い) なんとぞ思ふ」を口にします。すると老女は、この歌が詠まれた時のことを話し始めます……夫の大江惟章(おおえのこれあきら)が心変わりをしたので、小町が憂いに沈んでいた頃、三河国へ下る文屋康秀(ふんやのやすひで)が共に下るように誘った際に、自分が詠んだ歌であると漏らし、昔を思い出したと涙を流すのでした。

⑥ 小町の詠嘆「クリ・サン・クセ」

小町は、昔と今に思いをめぐらします。その昔、ある人が会えない悲しみて涙にくれる心を「包めども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬ目の涙の雨」と詠んで自分に贈ってくれたことを、今はただ思い出すだけ。老いた今、昔を懐かしみ流れる涙は何の名残りなのか……さらに「思ひつつ寝(ぬ)ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを」と詠んだ、恋に生きた昔。恋に無縁の今は、ただ長い年月を送り、老い衰えて命の終わりをむかえるだけのこと、はかない人生を省みます。

⑦ 「あるはなく無きは数添う世の中にあはれいづれの日まで嘆かん(先立つ人が増えていく無常のこの世で、いつの日まで自分も嘆いていられようか)」と詠んだのに、いつまでも生き残っていると小町は思います。昔を恋い偲んだ時代は遠い昔のこととなって、今は初老の頃さえもが恋しいのです。

⑧ 昔は、一夜の宿であっても豪華に飾られた家で華やかな暮らしをしていました。今は粗末な庵で眠る身。諸行無常を表す関寺の鐘の声も、生あるものは皆滅すと告げる山風も、老いの身には響いてきません。ただ花や木の葉が風に散る時には、墨をすって歌を詠みしただけです。小町は言い、短冊を手にとり、扇を筆に見立てます。しかし、老いゆえに思うようにならない弱った身を悲しむのでした。

⑨ 小町は七夕の祭りへ

稚児が七夕の祭りに遅れると声を掛けると、僧は小町を祭りに誘います。小町を支え立ち上らせ、小町は杖を手に庵から歩みを運びます。百歳の衰え果てた小町の姿です。

⑩ 稚児の舞

稚児が小町に酌をします(扇が酒器に見立てられます)。盃が廻り、稚児が舞を舞うと、小町は舞に心を惹かれ、扇で拍子をとります。小町の舞

⑪ 稚児の舞を面白く思った小町は、豊(とよ)の明(あかり)の五節(ごせち)の舞を思い出します。今日は七夕なので、袖を七回翻(ひるがえ)すのがふさわしいと言い、舞を静かに舞います。「老女之舞」では途中に「休息」と呼ばれる印象的な所作が入ります。

⑫ 舞の手を忘れ、足元をよろめかせ舞う小町。舞の袖を返しても、昔のようにはなりません。昔を恋しく思い座り込むのでした。やがて初秋の夜が明けてきます。小町は杖にすがり、庵へ帰っていきました……「百年(ももとせ)の姥」として名高く伝わったのは、小町の老いの果ての名だったのです。

⑬ 結末

舞の手を忘れ、足元をよろめかせ舞う小町。舞の袖を返しても、昔のようにはなりません。昔を恋しく思い座り込むのでした。やがて初秋の夜が明けてきます。小町は杖にすがり、庵へ帰っていきました……「百年(ももとせ)の姥」として名高く伝わったのは、小町の老いの果ての名だったのです。

【解説】

神歌

〈神歌〉は、〈翁〉の一部分を着座のままて謡う、素謡としての名称です。〈翁〉とは祝福と祈祷の儀式的な演目であり、能狂言の本芸として非常に大切にされています。〈翁〉では颯爽とした若者の千歳(せんざい)、白式尉(白色の特別な老人面)の翁、狂言方の演じる三番叟(さんばそう)が、天下泰平・国土安穩・五穀豊穰を祈って謡います。本日の〈神歌〉は「とうとうたらりたらりら、たらりあがりららりとう」という翁の謡から始まり、「萬歳楽(まんざいらく)」の繰り返してしめくくられます。「萬歳楽」は雅楽の曲名でもありますが、平和な世が千年、万年も続くように願う祈りの言葉にもなっています。ほかにも、中世に流行した歌謡の一節「鳴るは滝の水、日は照るとも、たえずとうたり、ありうどうどう」という、滝の豊かな水が永遠にあふれ流れる様子や、鶴・亀などのおめでたい言葉も数多く含まれています。

舞囃子 高砂

八段之舞

舞囃子は面装束をつけずに、囃子と謡に合わせて能の一場面を舞う上演形態の一つです。例外もありますが、多くの場合、囃子のみに合わせて舞う舞を含んでいません。能の醍醐味が詰まった形態です。

〈高砂〉の前半では、住吉の老人と高砂の姥によって和歌の興隆と世の繁栄が一体であることが明かされます。舞囃子は後半の住吉明神の出現と舞が披露されます。一般的には、住吉明神は老人の姿で表されることが多いのですが、能では若く力強い男の神として現れ、能の舞の中でも最も早いテンポの舞「神舞(かみまい)」を舞います。特に本日は「八段之舞」という特別な舞です。常の舞は五段のパートに分かれています。また、「八段之舞」では常とは異なる区切りを設けて、縁起のよい八という数に分けています。速度も早まり、緩急がつかます。

結末場面の謡「悪魔を払い、おさむる手には寿福を抱き」の所作も印象的です。ほかにも、「青海波(せいがいは)・還城楽(げんじょうらく)・千秋楽・萬歳楽」といった雅楽・舞楽の曲名が謡い込まれています。

舞囃子 唐船

盤渉

能〈唐船〉は、日本に留め置かれていた唐人の祖慶官人(そけいかにん)が、来日した唐国の二人の子と、日本で生まれた二人を連れ故郷へ帰って行くという能です。舞囃子では、祖慶官人の一行が帰国の船に乗り込んだ結末が舞われます。祖慶官人が船中で喜びの舞楽として「楽(がく)」を舞うと、やがて船は帆を高く上げ、風を得て海を進んで行くのでした。

「楽」は舞楽の趣で舞われる舞です。どこか異国情緒の漂う独特の旋律が特色。最初はゆったりと始まり、次第にテンポがあがります。数多く足拍子が踏まれ、リズムミカルな舞です。本日は小書「盤渉」による上演です。「楽」の調子が、途中から常よりも高くなります。

能 関寺小町

能は〈関寺小町〉(姨捨)〈檜垣〉を「三老女」として大切にしており、中でも〈関寺小町〉は秘曲中の秘曲として扱われています。

〈関寺小町〉の初出は応永二十六年(一四一九)の奥書を持つ、世阿弥の伝書『音曲口伝』です。世阿弥作の可能性が高いことが指摘されています。世阿弥伝書『風姿花伝第二物学条々(ものまねじょうじょう)』には、老女ではありませんが、老人の振舞だからといって腰や膝を屈めると、花(魅力)が失われ古くさい演技に見えること記され、世阿弥はその演技の難しさを「老木に花の咲かんがごとし」とたとえています。この比喩は『花伝第七別紙口伝(べつしくだん)』にも見え、ここでは花を咲かせるための具体的な演技の基準があげられています。すべての所作を拍子に少し遅れるようにすること、そのうえで若やいで見せたがる老人の心持に、老いた体がついて行かないという道理を知ることが老人の舞の真髓と説きまします。世阿弥の言説が現代の老女の舞にそのまま繋がるものではありませんが、〈関寺小町〉の舞の後には「老木の花の枝、さす袖もた忘れ」と謡われます。〈関寺小町〉には、老いの舞の優美さと難しさが込められているといえます。

(次頁へつづく)

(関寺小町の解説つづき)

小野小町はさまざまな伝説に彩られた人物であり、能では〈通小町〉や〈卒都婆小町〉などが有名です。〈通小町〉は小町の霊と深草少将の霊が登場し、少将が小町のもとへ百夜通いをした有様を示すもの、〈卒都婆小町〉は零落し徘徊する老残の小町が僧と仏教問答をし、小町に深草少将の霊がとり憑く内容です。

〈関寺小町〉はこれらの小町物とは趣が異なります。小町の和歌の才に焦点をあて、才能豊かに歌を詠んだ昔と、老いた今を照らし合わせて揺れる小町の心が描かれています。

小町は庵に一人たたずみ「あら来し方恋しや」と、侘しい暮らしの中で孤独に過去を思います。これが小町のいつもの夕暮れなのかもしれません。しかし、七夕の今日は違いました。僧が稚児を連れ、和歌の話聞きにやってきました。僧の傍らに控えて、和歌に心を寄せる稚児の存在は、小町に若い頃の歌を思い出させるきっかけといえるでしょう。『古今和歌集』『仮名序』を引いて歌の講釈をしながらも、「衣通姫(そとおりひめ)」やかつて詠んだ自らの歌に話が及ぶと、小町はもはや自分を「埋もれ木」のままにはしておけず、「われ(私)」が詠んだと明かしてしまいます。一方で、素性があらわになった恥ずかしさにいたたまれなくなるのです。それでも昔に詠んだ歌を思つては、今の老いの身と引き比べて感慨に浸り

昭和五十五年の第二回花影会では武田太加志氏が〈関寺小町〉を舞われました。太加志氏のご著書『二人静』には能の舞台となる関寺の旧跡を訪れた時のことが、二冊目にあたる『夕顔』には「関寺小町をすませて」と題した随筆が記されています。秘曲〈関寺小町〉に挑まれた際の思いが伝わる文章です。

中司由起子(法政大学能楽研究所・兼任所員)



第42回花影会「関寺小町」(平成29年) シテ 志房
撮影: 前島吉裕

ます。「初めの老いぞ恋しき」と、初老の頃さえ恋しいと嘆く姿は、長い長い老いを生きたことを思わせます。人は一気に老いを実感することも確かにあるでしょうが、その実感さえもいつか「恋しの昔」と振り返ることになる、それを重ねて人は老いていく、と感じさせるような場面です。

小町は鐘の声や山風を聞いても「諸行無常・是生滅法(ぜししょうめつぽう)」の理は、今の自分には何の益もないと言いつつ切ります。ただ「飛花落葉(ひからくよう)」の風雅を歌に詠むことは、小町には老いても、なによりも大切なことであることが伝わります。なんとか短冊に歌を書き記そうとする姿に胸をうたれます。しかし、ここでも老いゆえに歌の強さ、艶が失われていることを悲しむのでした。沈む小町の心を引き立てるのが、華やかな七夕の祭りにふさわしい稚児の舞です。惹かれて小町も舞いますが、やはり思うように舞の手足は動かせず、「あら恋しのいにしへやな」と座り込んでしまいました。

このように、小町の心の動きが丁寧に繊細に描かれているのも本作の特色の一つでしょう。小町は昔を単に懐かしんでいるというよりも、ひたすらに「恋しや」と、強く惹かれる心を何度も口にして表します。妄執とも呼べるような気持ち、老いの身を通して表現することの難しさが〈関寺小町〉にはあるのかもしれない。



第2回花影会「関寺小町」(昭和55年) シテ 太加志
撮影: 前島久男